

## 『日陰者に照る月』論 その1

——社会的階層構造に見る対立と融合——

大野久美

## 序論

アメリカ演劇の出発点として歴史的役割を果たした偉大な劇作家ユージン・オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953) の作品分析には表現主義とフロイト、ユング心理学、ニーチェ哲学などからの視点が必要不可欠であった。オニールの後半の劇作品として4度目のピューリッツァー賞を獲得した自伝劇 *Long Day's Journey into Night* (以下 *Journey* と略す) の後に執筆された *A Moon for the Misbegotten* (以下 *Moon* と略す) は兄ジェイムズ・オニール・ジュニア (James O'Neill Jr.) への鎮魂歌と言われる作品である。時代背景は *Journey* から11年を経た1923年9月、実兄が亡くなるほぼ2ヶ月前に設定されている。多くの批評家が言うように、*Journey* では語り尽くされなかった兄への想いが書かれた作品と言える。オニールの兄についての劇であり、*Journey* の続編であると言われている。故に、この2作品を切り離して考察することはできない。<sup>1)</sup>

オニールは社会的表現主義から個人的無意識層へ、そして集合的無意識層を介して超意識層へ、さらに超意識層を包括した超絶意識層を舞台上で表現した。拙論『夜への長い旅路』<sup>2)</sup> 論では、これまでにない社会的階層構造を解明したつもりである。John Henry Raleigh は、*O'Neill's Long Day's Journey into Night and New Irish-Catholicism* で *Journey* をアメリカにおけるアイルランド・カトリシズムの最も偉大な文化表現であると明言している。<sup>3)</sup>

社会的階層構造の背景を知るためにもアイルランド移民のアメリカでの立場

を歴史から認識することは必須であった。山田史郎氏の『祖国・階級・信仰』の研究ノートは、アメリカにおけるアイルランド移民についての当時の状況が把握できる興味深い見解を示している<sup>4)</sup>。

その内容を抜粋すると、1840年から大量に流入し始めたアイルランド移民は、在来アメリカ人によって担われることのない最底辺の仕事に就いたとされている。東部・中西部の都市部では建設人夫や沖仲士や不熟練工場労働者、また中西部の田舎や西部では鉄道敷設工や鉱夫などの仕事が、アイルランド人移民の主な職場となった。彼らは低賃金の過酷な労働で、しかも季節性が強いが故の頻繁な失業等不安定な雇用に苦しめられただけではない。1840年代では、在来白人が組織する労働組合はアイルランド人の参加を拒絶することが多かった。何故、アメリカ白人がアイルランド人の参加を拒絶したのか。アメリカで禁酒運動が台頭する中で、飲酒癖の強いアイルランド人は、犯罪や貧困を広める元凶とされたからである。彼らは人種としては、在来アメリカ人やイギリス系から区別される「似非白人」であり、むしろ黒人や中国人と同等視されることもあった。こうしたアメリカ社会のアイルランド人移民を極限まで追い詰めたのが、ネイティヴィズムと呼ばれる反カトリック移民排斥運動であった。専制的で反共和主義的なローマ・カトリック教会が、プロテスタントの約束の地アメリカを占領しようとし、その先兵がアイルランド人移民に他ならなかったからである。排斥ムードが高まるなかで「カトリック」と「アイルランド人」とが同義語となると、プロテスタント長老派のアイルランド出身者たちは、自らを「スコッチ・アイリッシュ」と呼んで差異化しようとしたが、それに加えてカトリック系アイルランド人の排斥に荷担するようになったと指摘されている。これらの状況から、アイルランド人がアメリカへ移住し、その後如何に迫害を受けてきたかが推察できる。

これらの見解からも John Henry Raleigh が *Journey* をアメリカにおけるアイルランド・カトリシズムの最も偉大な文化表現であると明言したことは頷けるだろう。

アイルランド移民にとってアメリカ社会から侮辱と嘲笑の対象とされた時代

は、19世紀末にアイリッシュの社会・経済的地位が向上するまで続いたのである。歴史的事実を辿ることによって、アメリカ社会での移民の階層を明らかにした。*Journey*ではこれらの民族性を社会的階層構造として位置付けた。その上でオニールの両親の複雑な階層を土台に夫婦関係、母親と息子達の相互関係、父親と息子達の相互関係の違いを検討した。つまりオニールの両親は同じアイリッシュでありながら、底辺のアイランド移民（ブラック・アイリッシュ<sup>5)</sup>）に属する父親とアイランド移民でありながら中流（レスカーテン・アイリッシュ<sup>6)</sup>）に属する母親と言うように両親の社会的階層構造は、二つの階層に分かれる。その相互関係は兄と弟との関係へと繋がっていく。2つの異なったアイリッシュ階層間の葛藤と亀裂、ヤンキーによる軽蔑と冷遇、これらすべてが家族の不幸を助長したものと言えるだろう。言葉を変えれば、アメリカ社会に同化を試みたアイリッシュ移民がもたらす共通の意識とも言えるだろう。アイリッシュという一つの民族性を基底にもった社会的階層構造から、家族4人が、どのような心理構造と行動様式を辿るかを分析したものであった。<sup>7)</sup>

*Moon*に登場するフィル・ホーガンは、25年間アメリカの大地を耕し続けた小作家である。文字通り、底辺のアイランド移民（ブラック・アイリッシュ）に属する人物である。同じブラック・アイリッシュに属する人物として、女主人公であるホーガンの娘ジョージ・ホーガンが登場する。彼らと同じアイランド移民でありながら、底辺のアイランド移民（ブラック・アイリッシュ）に属する父親と、アイランド移民でありながら中流（レスカーテン・アイリッシュ）に属する母親を両親にもったジェイムズ・ティローン・ジュニアが彼らと向き合う。勿論ティローンは、オニールの兄をモデルにした人物である。3人とも同じアイランド移民でありながら、各々が複雑な深層心理で描かれている。上記に示した様に、社会的階層構造が極めて複雑な階層であることを明示しながら、この階層を基底に表現主義的、心理学的、哲学的側面から、彼らの言葉（対話）、行動様式を分析してゆく。

## Ⅰ 登場人物達の根底にある社会的階層構造の表れ

殆どのアイリッシュ・カトリックの移民、特に19世紀の移民達は、貧しく、手に職もなく、アメリカ社会経済の最底辺から全く新しい生活を始めることになった。更に、大部分がカトリックであった新たな移民達は、アメリカ生まれのプロテスタントには友好的に迎えられなかった。彼らが合衆国で出会った社会は、寛容さと、社会的多元性を最初から欠いていたし、その二つを自然に身に付けていくような社会でもなかった。アイリッシュ自らが、時に激しい妨害に会いながらも、断固とした努力を重ねて、そのような社会を築き上げていかねばならなかった。<sup>8)</sup>

ゆえに、登場人物の共通意識にはアイリッシュに対する劣等意識と、同時にアイリッシュとしての民族のプライドを生むのである。アイルランド人としてのアイデンティティを維持しているとも言えるだろう。

劇の場面はコネティカット州にある小作農フィル・ホーガンの家、時は1923年9月初めの或る日の正午頃から翌日の早朝まで。登場人物は5人。4幕を通じての舞台はアイルランド移民農夫の貧弱な荒れ果てた家屋を表し、全体が如何にも零細な小作人の生活振りを示している。

清水 由文氏の『19世紀アメリカにおけるアイルランド人移民の家族構造』によれば、アイルランド人移民は個人単位による適応よりも、どちらかと言えば家族を形成し、家族単位で最大限の収入獲得による幸福を追求するために、家族全員が就労する形態を選択し、できるだけ単純な家族編成を求めたものと思われる。また、典型的なアイルランド移民の家族構成は世帯主と、配偶者に子供3人がプラスされた5人ぐらいであるという分析を示している。<sup>9)</sup>

小作農フィル・ホーガンには4人の子供がいる。独立した2人の息子と、ジョージ、マイクの4人である。この点からもほぼ典型的なアイルランド人移民の家族構造が描かれている。

マイク・ホーガンは、20歳で姉よりも4インチほど背が低い。がっしりした

身体をしているのだが、姉と並ぶと殆どちっぽけにしか見えない。彼の顔は、アイルランド人によくある顔で、表情はむっつりしているか、抜け目なく知恵が働いているか、あるいは取り澄まして独善的であるかということになる。彼は、自分があらゆる戒律を守る善良なカトリック教徒であり、従って、新教徒だけの悪いカトリック教徒だのといった呪われた罪人達のいる世界にあって、全能の神から選ばれた者の一人だと言うことを片時も忘れない。要するにマイクは、ニュー・イングランドのアイルランド系のカトリック的ピューリタンのBクラスに属す。(第1幕)

第1幕でマイクは、父ホーガンに対する抑圧により家を出ようとしている。

マイク「・・・親父が納屋の角から覗いているんだもの、ちょっとでも休んだりしたら、いつもの手で忽ち捕まっちゃうよ。親父が、豚の檻の方へ行くまで待っているほか仕方がなかったのさ。親父は、あそこにいるのが分相応なんだ、老いぼれの豚め！」

生意気な弟の発言にジョージーは驚くべき速さで右腕をふり、彼の顎の一方に大きな手を命中させる。

ジョージー「父さんのことを、とやかく言うんじゃないよ。私にとっても父親だからね。あんたは嫌いでも、私は父さんが好きなんだ。」

現在一緒に暮している娘のジョージーは、ホーガンにとって唯一人の娘である。ジョージーを理解するためには、オニールの兄として描かれたティローンとの関係を知る必要がある。ティローンとジョージーの関係は、*Journey*を基礎として書かれたものであり、<sup>10)</sup>亡き母に対するティローンの複雑な感情が、母性的なジョージーへと移り、愛に変化して行く過程が見られる。

ジョージーは、オニール劇の女性には珍しい容姿をしている。それは次のト

ガキから分かる。

ジョージは28歳である。女にしては、あまりに大きい、身長は靴を脱いで5フィート11インチ、体重は約180ポンドである。彼女の肩はなで肩だが、がっしりしており、大きくて堅い乳房のついた胸は幅が広く、腰は太く、それでも尻や太股に比べれば、ほっそりして見える。両腕は長くてまっすぐしており、筋肉は見えないけれども、非常に力強い。両脚についても同じことが言える。彼女は余程強い男以外なら、どんな人間に比べても力強く、普通の男二人分の力仕事ができる。だが、彼女には男っぽいところはなく、どこから、どこまでも女性的である。彼女の顔を見ると、アイルランドの血が流れていることがありありとわかる。——長い上唇、小さい鼻、濃く黒い眉、馬のたてがみのように太くて堅い黒髪、そばかす、日焼けした白い肌、張り出した頬骨、頑丈な顎といったふうだ。 (第1幕)

彼女は舞台上「娘」「姉」「娼婦」「淑女」「母親」という多様な役柄を演じる。容姿から想像できない程、男性のために尽くす女性として存在する。この点からもオニール劇の女性には少ないタイプである。しかし、反面オニール自身や彼の兄にとっても理想の女性だったかも知れない。*Journey*での母親メアリーにはない逞しさ、包容力を持っている女性である。

アイルランド女性のイメージは「悲しむ女性、耐える母」であると言われていた。そのイメージを、良く表していると思われるオニールの言葉がある。

オニールの創作ノートによると「ジョージはティローンとの結婚など不可能だし、彼との情事さえ夢見ることはないのだと認識する一方で、彼は、彼女を求めているのか知れないと期待し、しかし、その後すぐに自分のような『醜い雌牛』に肉欲を抱くはずがないとを感じる」と述べている。<sup>11)</sup>

第1幕での父と娘との最初の会話である。

ホーガン「お前の痲癩がどうした、何だい、でぶの雌牛！」

ジョージ「雌牛で結構、不細工なちびの雄山羊よりずっとましさ。まあ腰をおろして頭を冷やすんだね、年寄りが真昼間にあまり腹を立てて走りまわるもんじゃないよ。暑気当たりを起こしちゃうよ」

「でぶの雌牛」と怒鳴り声を上げられてジョージは反発しながらも、心底父親とは対立してはいない。

さらに、ホーガンは「本当に生まれた娘が雌牛のように大きくて強い、根性が曲がって親を親とも思わないことまで、雌牛同然というんだからな。どうだい、こうしてお前が棒を握って突っ立っている姿は！ 全くもって、コネティカットの因業娘ってのはお前のことだ」と言う。

この台詞は、たった一人家に残っていた息子マイクまでこの土地を離れたので、(実はこの家出を影でジョージは後押ししたのであるが)、この怒りの矛先を向けるのは信頼して止まない娘ジョージーしかいないことを示している。

父を慰めるためにジョージーが、次のように言う。どんなに罵倒されてもアイルランド人特有の「耐える女性」として描かれている。

ジョージー「大丈夫、父さん、落ち着いてごらんよ、6ドルであの子が厄介払いできたのなら安いもんだって気になるよ」

ホーガン「そうかもしれないな・・・実は、俺は、あいつが、どうにも虫が好かなかったのさ。・・・トマスやジョンだって同じさ・・・奴らはな、皆お前のお袋の一族に似やがったんだ。死んだお袋だけさ、あの一族で骨があったのは。他の奴はみんな信心深くてさ。禁酒の説教ばかり、ぶってやがるから、肝心の酒を飲む暇なかった。罪を告白するのに、かかりきりだもんで、本当に罪を犯す暇がないと、きたな。人間の屑だ、奴らは！そこへいくと、お前は、俺だとかお前のお袋だとかに似てるから有難いよ。・・・可哀想にお前のお袋は、あのできそこないを、生んだ時に死んでしまったんだ！ あれ以来、おれは教会

の敷居を跨いだことがない、これからだつてご免だ」(第1幕)

この2人の会話にはホーガンのアイルランド移民としての特有な「アルコール」が好きであるのがよく分かる。これは、*Journey*で描かれた男たちのアルコール好きの特質と似ている。

*Journey*のタイロンは、オニールの父親像でもあるが、「貧しく、無知なアイリッシュ」というイメージが表す家柄を消したいという執念があった。もちろんアイリッシュ・アメリカンとしての強い民族意識とプライドは持っていた。巡業中でも日曜のミサには、欠席しなかった敬虔なカトリックであった。この敬虔さは妻と共通する点である。アメリカ社会での同化が出来ないのは、タイロンだけではなく、妻も2人の息子も同じと言える。家族4人は人々と交わることができないと言うより、あえて、交わろうとはしなかった。ホーガンにはタイロンの様な信仰心はない。これは上記の彼の台詞からも分かる。

そして、タイロンと違い、アメリカと同化しようとは努めてはいない。どこまでも、アイルランド移民として、泥に塗れて生きて行く、生き抜こうとしているのである。

また、次のホーガンの容姿、服装などからもその当時のアイリッシュの小作農であることがよく分かる。

ホーガンは55歳、身長はおよそ5フィート6インチである。太い首、肉づきの良い、撫で肩、樽のような胴体、太短い脚、大きな足といった体をしている。両腕は短くて筋肉が発達しており、手は大きくて毛深い。頭は丸く、薄茶色の髪が薄くなりかけている。顔は肉づきが良く、獅子鼻、長い上唇、大きな口、小さな青い目、それに白豚を思わせるような白くなったまつ毛と眉毛がついている。彼は頑丈そうな安手の靴、汚れた胸当てズボン、不潔な半袖のアンダーシャツといったものを身に着けている。両腕と顔は日焼けして、そばかすがある。頭には古いつばの広い、粗い麦わらの帽子がのっているが、それは馬に被

らせた方が似合いそうな代物である。彼の声は甲高く、はっきりしたアイルランド訛りである。 (第1幕)

彼は時あるごとに次の歌を口ずさむ。

「ああ、じゃがいもはちっぽけだよ　ここいらあたりじゃ  
 ああ、じゃがいもはちっぽけだよ　ここいらじゃ  
 ああ、ちっぽけなじゃがいもを　秋が来たら掘ってさ  
 皮まで皆が食べちまうのさ　ここいらあたりじゃ」 (第2幕)

これは古いアイルランドの嘆きの歌である。この歌の背景にはアイルランド<sup>1)</sup>のじゃがいも飢饉がある。オニールの父タイロンが生まれた時、アイルランド島はじゃがいもの凶作によって大飢饉に襲われる。最悪の年は何百何千という人々が飢えと病気で死んでいった。このじゃがいも飢饉は、単に飢饉による死亡や人口の流出に止まらず、アイルランド社会を根底から揺さぶり、人々の営み——政治・文化・社会・構造・宗教・共同体・家族・生活習慣——全体に大きな衝撃を与え、多数の移民を発生させたと言われている<sup>2)</sup>。

夢を抱いてアメリカへ渡ったのではないのである。「ここいらあたりじゃ、ここいらじゃ」の言葉の裏には、ホーガンのアメリカへの抵抗と反発への表れとも取れる。しかし、同時に故郷アイルランドへの思いが伝わってくるのである。

アメリカに対する、ホーガンの対立を言動や行動で示す所がある。隣地に住む百万長者のT・ステッドマン・ハーダーが訪ねてくる場面である。ハーダーは成金石油業者の息子で40歳に近いが、親譲りの財産で苦勞も知らず、冒険心もなく、人生の欲望もないといった男である。トガキの彼の容貌を見てもよく分かる。

普段は自信に満ちた態度で自分の優位を他人に認めさせているが、相手が自分とは世界の違う人間になると、いやに横柄で不安げな様子になる。彼の服装

( 90 )

は見事に仕立てられたイギリス製のツイードの上着、うね織りの乗馬ズボン、ピカピカに磨いたイギリス製の拍車つきの乗馬靴、そして手には鞭を持っている。  
(第1幕)

この人物はヤンキー貴族として *Journey* にも登場するが、直接争う場面はない。話題として家族の中で語られるだけである。*Moon* は、アイルランド移民対ヤンキー貴族との対立を赤裸々に描いている。ハーダー来訪の発端はこうである。ホーガン家の豚小屋に程近い所に、ハーダー家のアイスポンド(氷を作るための池)があるのだが、池近くの柵が何度修理しても壊れ、結果豚たちの格好の「お散歩」コースとなり、夏に飲む氷水に豚の味がして我慢ならないという訳で、ハーダーはその文句を言いに来たのだ。

ホーガン親子が経験から割り出した口論の戦術とは、相手の攻撃にすぐさま応じ、絶対に反撃の機会を与えないことである。彼らはまた、上手く調子を整えながらペースを変化させて相手を幻惑し、耳障りな叫びから、不意に、小声で打ち明けるような罵倒に移るといったこともやる。しかも、アイルランド訛りを態と誇張して、敵を一層混乱させるのである

アイルランド特有の多弁さで、相手を言い負かそうとしているのだ。

ハーダー 「(尊大で堂々たる態度を取ろうと決意して——ぶっきら棒に) あんた、  
ホーガンかね。」

ホーガン 「フィリップ・ホーガンさんと言ってもらいたいね——まとも  
な紳士なら。」

ジョージ 「(ハーダーを睨みつける) あんた礼儀を知らないの。細長い足で  
馬に乗るばかりが能じゃないよ。一体、馬屋で育てられたのかい。」

(第1幕)

ホーガンは太股を叩きながら、大声を張り上げて笑い出す。ジョージも彼に合わせて、げらげら笑う。笑いながら2人は、こういう芝居があった悪ふざ

けが、ハーダーを当惑させているのを観察している。

この2人の攻撃にハーダーは「ちょっと、ホーガン！ 私は何もここへ来たんじゃないんだ」——「お前のつまらない冗談が聞きたくて」と言うつもりだったが、ホーガンは彼を黙らせる。

ホーガン親子はハーダーの「私は何もここへ来たんじゃないんだ」と口走ったことに対して、猛攻撃を開始する。

ホーガン「(叫ぶ) 何！ 何だって。ここへ来たんじゃないって？ (彼はジョージの方を向く——囁いて) 聞いたかい、ジョージ。ふうん、こいつは、分からない。じゃ、どうやって、ここに現れたんだろうな。」

ジョージ「コウノトリにでも連れて来てもらったんだろう。仕様がないうるさだよ、変なものを連れて来て。」

ホーガン「・・・あなたが金持ちの下司野郎なんだな、隣の地所の持ち主の？ 一度こっちから出向こうと思ってたんだ、話をつけることが、あるからな。分かったか、大きな顔をしやがって！ ・・・そもそも、あそこを買った金はスタンダード石油の金だ、そいつを、辿れば、貧乏人から、かすみ取った金だ、泥足で踏みつけられた貧乏人の金だ——となると、あの土地は腹を空かした寡や孤児の涙で濡れている——」

(第1幕)

この台詞は *Journey* で語られることはなかったアイルランド移民として共通に抱く悲哀さ、苦勞の足跡が滲み出ている台詞である。

次は、アイルランド人特有のユーモアを言いながら相手を打ち負かそうとしている台詞である。

ホーガン「いいか、一体、貴様はどういうつもりで、ああいう汚い真似をするんだい、垣根を壊して、家の哀れな豚を誘き寄せて、氷の池でくたばらせるとはな。」

相手が退き始めた途端、ここぞと言わんばかりに、糾弾するのである。

ホーガン「国中の裁判所を引っ張り回してやるぞ！ あらゆる新聞の一面に、貴様の馬鹿面をデカデカと載せて、これぞ金の力に、ものを言わせる豚殺しと広告してやるんだ。万事けりがつく頃には、貴様はまるでアイルランドのお通夜に現れたイギリス国王と言った気分になっちまうんだ！」  
(第1幕)

ホーガンが、ハーダーを追い出すことで、ホーガンの農場は、物質信仰というアメリカ的価値観が通用しないことを示していると言える。

ヤンキー貴族との対決の一部始終を、ジョージの寝室に隠れてこっそり見物していたティローンもホーガン親子の勝利に喝采する。

ティローンは *Journey* でユージン・オニールの兄として描かれたジェイミーである。この作品はオニールが兄に捧げた「哀悼詩」であり、現実には手に入らなかった「慰め、許し、心の平和」を彼に与えようとするための作品であると評価されている。<sup>13)</sup>

ティローンは40代前半、身長は約5フィート9インチ、肩幅が広く、胸が厚い。元々は、いい体格をしていたのだが、放蕩のために、それは弛んで、だらしなくなってしまう。だが彼の顔は、不健康に、腫れぼったくなり、両目の下が、浮腫んではいるが、今だに美男の顔である。彼の黒い髪は薄くなりかけており、禿げを隠すために、髪のを分けて、後ろへ撫で付けてある。目は茶色で白目の部分は、充血して黄ばんでいる。大きな鷹鼻のために、彼の顔には、どこことなく悪魔的な感じが漂っているが、それは彼が絶えずシニカルな表情を浮かべているからである。だが、彼が微笑むと、今でももとの若々しくて投げやりなアイルランド的の魅力が微かに残っている。つまり感傷的でロマンチックな憎めない、ろくでなしの魅力である。・・・この男はずっと女に持て、男には飲み友達として好かれてきたのである。・・・この服装を見れば、彼は

身嗜みの良いブロードウェイの賭博師か、ウォール街の相場師に間違われたい  
と思っているかのような服装をしていることが分かる。(第1幕)

ティローンの姿から、*Journey*でユージン・オニールの兄として描かれたジェイミーよりも一層真実の姿を描こうとしていたことが分かる。ティローンが、ホーガン親子と異なる点はアイリッシュ・アメリカンとして育てられたことである。しかし、アイルランド人としての共通の民族意識を持ちながら、それに抵抗している。反面、アメリカ人としての意識も自覚できないでいる。この点は*Journey*のジェイミーと変わりはない。しかし、大きな相違点がある。アイリッシュとしての抑圧に抵抗をし、救われないうまま幕を閉じたジェイミーであったが、*Moon*のティローンはジョージの存在によって明らかに変化してゆく。ティローンの姿を捉えることによって、オニール自身のアイリッシュ・アメリカンとしての真実の姿も見ることができるのである。

ティローンとホーガンの最初の対話である。

ホーガン「地主がまた現れたのに、猟銃が手元にない。ミサの文句を唱えているのかい、ジム。・・・一体あれは——一体なんの悪口だい。」

ティローン「ごく大雑把に訳せば、まあ、こういうところさ。(彼はホーガンのアイルランド訛りを真似る。)[今畜生、お前って爺は運のいい奴じゃないか、こういう結構な農場にいやがってよ、どちらを向いても石ころだらけでは、あるがね。]

(第1幕)

2人の会話から同じアイルランド移民の血を引く者同士であるが、地主と小作人という立場の違いが明らかである。しかし、外見的な上下関係はあるが、内面では移民として共通の意識を理解しているのである。

小作人のホーガンを相手にティローンは、学生時代の話始める。ティローンが娼婦を妹と偽って大学に連れて行き、それが発覚して卒業間近で退学になったという型破りな経歴の持ち主であることを懐かしそうに語る場面である。

大学の神父の権威を茶化し、冷笑するティローンの本心はアイリッシュ・アメリカンとしての抵抗が表れている所であると同時に、亡き父の期待に応えることが出来なかった悔恨、いつも家族の中で自己疎外を感じていた空しさを、ホーガンの前では曝け出すことができるのである。我々は、*Journey*では語られなかった兄の横顔を知ることにもなる。

ティローンの奥底にある複雑な社会的階層構造は、ホーガン親子とは明らかに異なるものである。つまりオニールの両親は同じアイリッシュでありながら、底辺のアイランド移民（ブラック・アイリッシュ）に属する父親と、アイランド移民でありながら中流（レースカーテン・アイリッシュ）に属する母親と言うように、両親の社会的階層構造は、二つの階層に分かれていた。彼はその相互関係を引き継ぐこととなったからである。

アイリッシュ・アメリカンとアイリッシュの関係は地主と小作人との関係である。地主のティローンが、小作人のホーガンに打ち負かされている。

ティローン「いつものように<sup>あくせく</sup>齷齪と、働いておいでのようで。」

ホーガン「貧乏人だって、昼休みに一息入れるくらい、いいじゃないか。」

金持ちの地主に嫌味を言われなくても、いいと思うがね。」

ティローン「《金持ち》は良かった。そうとも、俺は大金持ちだよ、あんたが、貯めた地代を、そっくり払ってくれりゃな。」

ホーガン「金を払って欲しいのは、こっちだよ、農場とは名ばかり、こういう石ころだらけの土地に住んでやってるんだからな。（目をまばたかせた）だがね、いい知らせがあるんだよ、この秋は、きっと豊作だぜ。ががいもも、あざみも、よく茂っているし、つた漆が、こんなに見事に伸びたのは初めてだ。」

（第1幕）

ホーガン親子の土地への執着心は強い。何ものにおいても、土地を最優先している行動様式がある。やはり、これはアイランド移民として忘れることができない共通の意識である。どのような状況におかれても、大地を耕すのである。

ジョージは、どんな事が起ころうとも、いつも「日向で一生懸命働いてさっぱり、したいんだよ」と言う。大地への愛を感じる言葉である。

なぜ、アイルランド人が大地を何よりも大切に思い、共に生きようとするのか。それは『アイルランドからアメリカへ』の次の一節からも、推察できるのではないだろうか。じゃがいもの疾病、大飢饉、そして飢餓状態から、新世界への脱出は、生き残った人々の心に決して消えることのない鮮明な記憶を焼き付けた。50年という歳月を経てもなお、アメリカに住む一人のアイリッシュ男性は、ジャガイモの収穫が無くなった後の光景を、はっきりと記憶していた。「ジャガイモ畑の土の上には、一面に雑草が生え・・・美しい花を咲かせていた。太陽に輝く、その黄色い花は・・・今も、しばしば私の前に一枚の絵画として立ち現れる。死神の勝利を描いた絵、死神の手下どもが、美しい冠で畑を飾っている絵だ」移民達の一部には、カトリック教会の教えに影響されて、大飢饉は、自分たちの罪に対して神が下した天罰であると信じる人達もいた。<sup>14)</sup>

次のジョージとホーガンのやり取りからホーガンが、ティローンの父親にも遠慮なく発言し同じアイルランド移民として評価していたことは明白である。

ホーガン「・・・だってあいつの親父はな、ドン底から出世して金持ちにも有名にもなった奴だが、身分が、どうこうなんてことは、これっばっちも言わなかったぜ。あいつは、よく、俺なら案山子にも着せないような服を着て、畑仕事をしてやがったんじゃないか。(敬意を込めて) 惜しい男を亡くした、あれこそ、本当のアイルランド紳士だった。」

ジョージ「・・・小作料を下げても、家にペンキを塗ってくれなきゃ、ここから出て行くって、言ったもんだね。」

ホーガン「あれは、利いた。あいつは、後の言葉が出なかったからな。」

ジョージ「どうだか。あの人は、父さんに向かって、貴様のような、根性曲がりアイルランドから、出たためしはないって、言ったがね。」

ホーガン「それは感心して言ったのさ。それから、俺達は、飲んだり、喋ったり、歌ったり、小作料のことなど忘れて、イギリスの悪口を言っ

てる内に、あいつのお帰りとなる訳さ。(懐かしそうに笑う) ああ、まったくあれは、偉い奴だった。」 (第1幕)

ホーガン、ジョージ、ティロンの根底にある社会的階層構造はホーガン、ジョージ (共通の社会的階層構造をもつ) 対ティロン (異なった社会的階層構造) に分けられるであろう。ホーガン親子は、アイリッシュ独特の機知と毒舌がある。そして、この親子は、アメリカの物質主義から解放され貧しくとも自由に暮らしている。

ティロンは、アイリッシュ・アメリカンとして生きなければならないことにいつも重圧を感じながら、アメリカの物質主義の元で自己のアイデンティティを求め、さ迷っているのである。すなわち、複雑な自己矛盾に苦悶する彼の心の叫びが聞こえてくる。ホーガンのように解放されたいという願望を、奥底に抱いているのは明らかである。。

《註》

- 1) Virginia Floyd, *Eugene O'Neill at Work*, ed. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1981 p.371
- 2) 大野 久美、『夜への長い旅路』論—社会的階層構造と心理的深層を介した行動様式の複雑性— 専修人文論集 第84号 2009
- 3) John Henry Raleigh, *O'Neill's Journey into Night and New England Irish-Catholicism O'Neill A Collection of Critical Essays*, Prentice-Hall, Inc. 1964 p.125
- 4) 山田 史朗、祖国・階級・信仰—アメリカにおけるアイルランド系移民の結社—同志社大学人文科学研究所 2005年 74号 pp. 80-81
- 5) 武藤 脩二、「メランコリー表象の変容と「進化」—ユージン・オニールの発見」大阪大学出版会、 p. 295
- 6) Joel Pfister, *Staging Depth: Eugene O'Neill and the politics of psychological discourse*. The University of North Carolina Press, 1995 p.27
- 7) *op. cit.*, 大野 久美、『夜への長い旅路』論 p.101
- 8) カービー・ミラー、『アイルランドからアメリカへ』、東京創元社、p.20
- 9) 清水 由文、『19世紀アメリカにおけるアイルランド人移民の家族構造』、桃山学院

大学総合研究所紀要、第33巻第3号 p.106

- 10) Doris Falk, *Fatal Balance: O'Neill's Last Plays*. Eugene O'Neill. ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. p.30
- 11) *op. cit.*, Virginia Floyd p. 381
- 12) 高柳 乃輔、馬鈴薯飢饉とアイルランド移民、北陸史学会40号 1991年 p.1
- 13) Fintan O'Toole, Byrne&Castmates Add Light to Moon, *New York Daily News* 21 March, 2000
- 14) *op. cit.*, カービー・ミラー、p.59

『日陰者に照る月』の邦訳は小田島雄志・喜志哲雄訳を参照した。

ページ数の関係上、後半の部分、『日陰者に照る月』論 その2——社会的階層構造に見る対立と融合— II *A Moon for the Misbegotten*の表現主義的、フロイト的、ユング的分析 III *A Moon for the Misbegotten*のニーチェ的分析、IV 結論については次号に掲載予定である。

(おおの くみ・委嘱研究員)

## A Moon for the Misbegotten —Conflict and Union in Social Class Structures—

Kumi Ohno

In studying and analyzing the works of the great American playwright, Eugene O'Neill (1888-1953), I find that Expressionism, Freud's and Jung's psychology, and the philosophy of Nietzsche are the key factors that should be considered as the core factors of his works. His masterpiece, *Long Day's Journey into Night* (hereinafter referred to as *Journey*), written in the latter part of his life, is the autobiographical play that won his fourth Pulitzer Prize, and this was followed by *A Moon for the Misbegotten* (hereinafter referred to as *Moon*), which is considered to be a requiem dedicated to his older brother, James O'Neill Jr. *Moon* is thought to be a sequel to *Journey*.

In my previous paper, "O'Neill's *Long Day's Journey into Night*: The Complexity of Behavioral Patterns through Social Class Structures and Psychological Unconsciousness," I analyzed the deep structure of the characters' psychology from the viewpoint of complex social class structures.

To review the historical background was a necessary approach to understand the social status of Irish immigrants in the United States.

The historical facts had led to a clear understanding of the layers of social classes that existed in American society. In other words, historical evidence witnessed the social hierarchy of immigrants. In *Journey*, the ethnic attributes were depicted as social class structure.

O'Neill's parents were Irish immigrants. His father was a descendant of the so-called

Black Irish, whereas his mother was from the Lace-Curtain Irish, a middle-class Irish people. Thus he was born from two different social classes.

Phil Hogan is one of the characters in *Moon*. A descendant of lower-class Irish immigrants (Black Irish), he has been working for 25 years as a tenant farmer. The female main character, his daughter, Josie Hogan, another Black Irish, also plays an important role. James Tyrone is the son of Irish immigrant parents, a Black Irish father and a Lace-Curtain Irish mother, and he is a model of O'Neill's older brother. All of these Irish immigrant characters are described through explorations of the depths of psychological complexity. The play features the racial attributes of Irish people at the core, revealing the intricate complications of the hierarchical layers.

In this paper I have analyzed the patterns of behavioral conduct and the speech (dialogue) from the viewpoint of Expressionism, based mainly on the topic of the social class structure. (To be continued to the next issue.)